



目次

生産現場情報：	秋田の農業を未来につなぐ若きリーダー ～秋田県農業協同組合青年部協議会委員長 齊藤拓さん～	P 1 ～ 3
営農支援情報：	水稻の有効茎決定期の生育概況と今後の肥培管理及び幼穂形成期の適宜肥培管理	P 4 ～ 7
ご 紹 介：	①「令和4年度園芸畑作反収向上に向けた検討会」開催 ②「令和4年度全県JA稲作担当営農指導員大会」開催 ③水田の異常還元における調査方法の勉強会を行いました ④秋田県立大学スマート農業指導士講座開講 ⑤ゆめのせかいをえがいてみよう「モーモーとうろう展」開催 ⑥「第33回秋田県JA農業機械大展示会」を開催 ⑦「えだまめ販売戦略会議」を開催	P 8 P 9 P10 P11 P11 P12 P13
お 知 ら せ：	秋田米新品種「サキホコレ」イメージキャラクターを決定！	P14

秋田の農業を未来につなぐ若きリーダー

～秋田県農業協同組合青年部協議会委員長 齊藤 拓さん～

新JA青年部委員長紹介

令和4年度から、大仙市神宮寺出身の齊藤拓（さいとう たくま）さんが、新しく秋田県農業協同組合青年部協議会の委員長に就任しました。齊藤さんは、1992年生まれの29歳。現在両親と3人で、約33haの水稲を中心に（うち直播栽培6ha）スイカ栽培などを手掛けています。幼いころから農業が身近にあった齊藤さんでしたが、就農するイメージはあまりなかったそうです。しかし地元の農業高校で深く農業を学ぶことによって、農業の魅力に引き



込まれ、就職するなら最初から農業をしようと決意。高校卒業後、秋田県農業試験場で「フロンティア農業者育成研修」を受講し、営農に必要な技術や知識を身につけ20歳で本格的に就農しました。2021年には地域農業の活性化に向け、地域のみなさんを元気づけようと東京オリンピックの聖火ランナーを務めました。高校時代の陸上経験を活かし、大仙市の第1走者として200mを快走。生産者の仲間達、地元住民の皆さんからの温かい拍手を受け、「逆にパワーをもらいました」と話していました。

新品種「サキホコレ」への思い

齊藤さんは令和3年産の「サキホコレ」先行作付けから生産に携わってきました。齊藤さんを含むサキホコレ生産専門部会の部会員143人が一丸となって高品質・極良食味米生産に励んでいます。JA秋田おばこでは令和4年度から、実需が求める品質に合わせた米を販売するため、玄米たんぱく質含有率や農薬・化学肥料の使用などで独自の栽培基準を設け、基準となる「ベーシック」、特別栽培米の「プレミアム」、「プラチナ」とランク分けしています。このうち、齊藤さんが取り組んでいるのは「ベーシック」。「まずは基準の方法でおいしい米をつくらなければ、どんなに高いランクに挑戦しても意味がない」という思いがあるためです。講習会で学んだ内容と自身のほ場を照らし合わせながら、適切な栽培管理に専念しました。



その結果玄米たんぱくの平均値は5.7～5.8となり、「ベーシック」の基準である6.4をクリアするだけではなく、「プラチナ」基準に近づく数値となりました。「ベーシック」でもこれだけ良い米ができると分かり、4年産米への自信につながっています。

齊藤さんのは場では5月18日から、本格デビューに向け「サキホコレ」の田植えが行われました。「ようやくデビューのスタート地点に立てた。間違いなく全国においしい米を届けられる自信がある」と意気込みを語り、作業に汗を流していました。齊藤さんは、栽培の様子や生育状況を自身のSNSで定期的に投稿し部会員との栽培技術の共有や、消費者へ向けたサキホコレの知名度向上に努めています。



ＪＡ青年部活動

委員長に就任後は、青年部の活動を精力的に取り組んでいます。6月からは、ABSラジオ「ＪＡ青年部と『いただきまーす!』」がスタートしたほか、「ＪＡみどりの広場」番組内の『がんばってます!』のコーナーで、青年部の委員や盟友が交代で出演し、青年部の活動や農業の現場を紹介しています。

また、3年ぶりにＪＡ青年部が主催する農産物市「うめもんマルシェ」の開催が決まり、新型コロナウイルス感染対策に取り組みながら行われます。

ABSラジオ「ＪＡ青年部と『いただきまーす!』」

放送日：第1・第3金曜日14：29～（5分程度）

※「まちなかSESSIONエキマイク（月曜～金曜13：00～15：55）」番組内



6/3の初回放送日に出演した様子

AKT「ＪＡみどりの広場」毎週土曜日放送（11：00～11：25）

放送日：毎月第3週目

「がんばってます!」のコーナーに若手農業者が出演し、農業の取り組みを紹介





令和元年に開催された「うめもんマルシェ」の様子

8月：うめもんマルシェ（秋田駅大屋根下アゴラ広場）3年ぶりに開催予定。自慢の農産物や加工品の販売PRをします。

今後の主な活動

- 11月予定：秋田県J A青年大会
- 1月予定：東北・北海道地区青年大会
- 2月予定：J A全国青年大会

※その他、県議会議員への要請活動や、青年部PR動画の作成、県青年部勉強会など予定しています

7月からは、若手農業者に登録を呼びかけLINEを活用した営農情報などを発信し、意思の統一を図っているほか、全国の青年部や他団体・異業種との意見交換をしながら、秋田の農業の活性化を目指しています。高齢化が進み農業者が減少する中、齊藤さんは「新規農業者は実は増えてきています。ただ、後継者がいなく農業をやめていく方も多し。スマート農業も積極的に取り入れて効率化、省力化も図っていくが、機械を動かすのも結局人なんです」と話します。また、「自分の周りには、今後の農業に対し強い思いを持った盟友がたくさんいる。今の農業を考えてくれる人は多いが、自分は20年後を見据えて仲間達と意識を合わせている。新しい取り組みにも挑戦していく事も大切だが、今の農業をしっかり守って次世代につないでいきたい」と広大な水田を見ながら力強く話す姿は、秋田の農業を守る責任感と意識の高さが伺えました。「これから青年部の仕事で毎日忙しいですよ」と楽しそうに話す新しい青年部のリーダーは、今日も趣味の日本酒をたしなみながら、農業に思いをはせていることでしょう。



営農支援部 営農支援課 ☎018-864-2461



水稻の有効茎決定期の生育概況と今後の肥培管理 及び幼穂形成期の適宜肥培管理

今年の田植作業は、始期が5月11日（平年：5月13日）、盛期は5月22日（平年：5月23日）とほぼ平年並みでした。5月25日以降に田植えを行ったほ場では、活着の停滞や生育初期の分げつの発生が少ないほ場が多く見られました。

気象庁は、東北地方北部は6月15日ごろに「梅雨入り」（平年6月15日ごろ、昨年6月19日ごろ）したとみられると発表しました。平年と同じで、昨年より4日早い梅雨入りとなりました。

また、向こう3か月の気温は暖かい空気に覆われやすいため高く、降水量は平年並みと予想をしています。各ほ場ごとに生育状況を把握し、栄養診断に基づく施肥管理や、ほ場状態に応じた水管理をしてください。

区分	地域	始期（5%）			盛期（50%）			盛期（95%）		
		本年	前年	平年	本年	前年	平年	本年	前年	平年
播種作業	県北	4/13	4/12	4/13	4/19	4/18	4/18	4/27	4/26	4/26
	中央	4/10	4/10	4/11	4/18	4/18	4/18	4/27	4/28	4/28
	県南	4/18	4/19	4/20	4/24	4/25	4/25	4/30	5/1	4/30
	全県	4/11	4/11	4/11	4/21	4/22	4/22	4/30	4/30	4/30
耕起作業	県北	4/21	4/21	4/22	4/30	5/1	5/2	5/6	5/10	5/10
	中央	4/12	4/15	4/17	4/23	4/25	4/29	5/6	5/6	5/9
	県南	4/29	5/1	4/30	5/5	5/6	5/6	5/12	5/14	5/14
	全県	4/15	4/18	4/20	5/1	5/2	5/3	5/11	5/12	5/12
田植作業	県北	5/13	5/15	5/15	5/21	5/23	5/22	5/28	5/30	5/29
	中央	5/8	5/11	5/11	5/19	5/19	5/19	5/29	5/29	5/29
	県南	5/14	5/17	5/17	5/23	5/24	5/24	5/30	5/31	5/31
	全県	5/11	5/13	5/13	5/22	5/23	5/23	5/30	5/30	5/30

（秋田県農林水産部水田総合利用課発行 作況ニュース参照）

◆有効茎決定期（6月24日）の生育概況

全県の「あきたこまち」の生育（県水稻定点生育調査結果）は、草丈32.6cm（平年比88%）、茎数314本/m²（平年比75%）、葉数8.6葉（平年差-0.1葉）、葉緑素計値45.6（平年比104%）となっています。各地域の平均では、「あきたこまち」は、平年に比べて草丈は短く、m²当たりの茎数は少なく、葉数は平年並みですが、特に茎数はほ場間差が大きくなっています。

「ひとめぼれ」は、草丈36.8cm（平年比95%）、茎数531本/m²（平年比103%）、葉数9.1葉（平年差+0.2葉）、葉緑素計値43.2（平年比106%）となっています。

定点調査結果（各地域振興局6月24日調査）

品種	地区	草丈			m ² 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	33.5	87	88	342	77	73	8.8	-0.3	-0.1	46.3	105	105
	中央	35.7	92	94	345	97	85	9.0	0.1	0.2	47.8	110	110
	県南	30.6	84	86	279	78	73	8.2	-0.5	-0.3	44.2	99	101
	全県	32.6	87	88	314	81	75	8.6	-0.3	-0.1	45.6	103	104
ひとめぼれ	中央	36.8	90	95	531	98	103	9.1	-0.2	0.2	43.2	105	106

（県農林水産部水田総合利用課発行「作況ニュース第4号」参照）

6月4半旬以降の高温により、生育は回復しつつありますが、6月上旬の低温の影響が大きく、多くのほ場で目標茎数を下回っています。さらに土壌の異常還元による下葉の黄化や分げつ発生の停滞が散見されます。移植が早くても目標茎数に達していないほ場や、移植が遅く葉数とともに茎数が少ないほ場等、ほ場間差が大きくなっています。

今後の気温は平年より高い予想となっており、有効茎数を確保するための好機とし、適切な水管理に努め、茎数を確保したら直ちに中干しを開始し、無効な分げつ発生を抑制するなど、ほ場ごとに生育を確認し、状況に応じて時期を逸しない栽培管理を徹底してください。

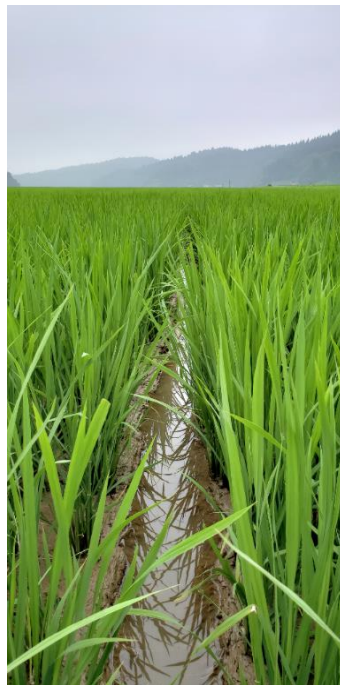
◆中干しによる分げつ抑制

目標茎数を確保したほ場では、直ちに中干しを行い、茎数が少ないほ場では、中干しの開始を遅らせるとともに、強い中干しは行わない等、ほ場ごとに生育を確認して、状況に応じた栽培管理を徹底しましょう。中干しは、無効分げつの発生を抑えるとともに、根の活力を高めて1穂粒数と千粒重を増加させる効果や、節間伸長を抑制し倒伏を軽減します。なお、中干しと合わせて溝切りを行うと中干し以降の水管理を効率的に行うことができます。中干しは、7～10日間を目安に行い、田面に亀裂が1～2cm入り足跡が付く程度とします。幼穂形成期に土壌水分が不足すると1穂粒数の減少を招くため、中干しは幼穂形成期前に終了し、その後は飽水管理または間断かん水に切り替えましょう。

また、中干しが十分にできなかった場合や、生育量が不足しているほ場では、中干し終了後も落水期間をやや長めの間断かん水としましょう。



溝切り



溝切り後



中干の様子

◆飽水管理

幼穂形成期頃から、湛水にせず、水田に3 c m程度入水し、自然落水させ（足跡に水がたまる程度の湿潤状態）、2～4日後に入水します。この作業を出穂期初め頃まで繰り返します。飽水管理をすることにより、根に酸素を供給し、根元の温度および地温を下げ、高温障害対策として有効です。

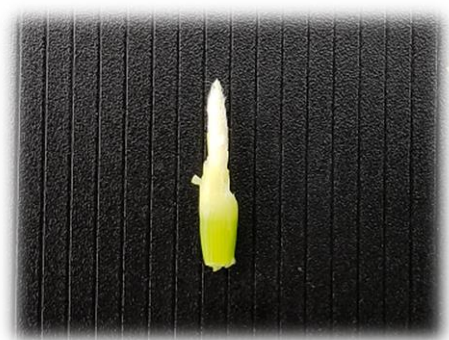


飽水管理の様子

◆幼穂形成期・減数分裂期

幼穂形成期（幼穂長2mm、例年7月15日頃）、減数分裂期（葉耳間長±0cm、例年7月25日頃）は、幼穂が伸長し、籾数、千粒重に影響を及ぼす籾殻の大きさが決定する時期であるとともに、倒伏に影響を及ぼす下位節間が伸長する時期でもあります。

まもなく幼穂形成期を迎えますが、穂肥の判断は生育・栄養診断の結果に基づいて行いましょう。



◆生育・栄養診断にもとづいた穂肥

生育診断は、草丈、茎数、葉色を測定し、理想生育と比較して生育を診断します。栄養診断値によって幼穂形成期の稲の窒素吸収量を推定し、理想窒素吸収量と比較しその多少により追肥の時期と量を判断し籾数を制御します。生育中期の栽培管理は、理想とする生育量と比較し、生育・栄養診断を実施しながら適切に行いましょう。なお、本年の生育は、地域差および移植時期の影響がみられることから、時期を逃さず幼穂形成期の栄養診断を実施しましょう。

有効茎決定期（6月25日）の理想生育量												
項目	草丈（cm）			茎数（本／㎡）			葉数（葉）			葉緑素計値		
	上限	理想	下限	上限	理想	下限	上限	理想	下限	上限	理想	下限
県北	36	34	33	462	428	394	8.7	8.5	8.3	43	42	41
中央	38	36	34	475	431	388	8.8	8.6	8.3	46	45	44
県南	36	34	33	378	346	314	8.6	8.4	8.1	44	43	42

幼穂形成期（7月15日）の理想生育量												
項目	草丈（cm）			茎数（本／㎡）			葉数（葉）			葉緑素計値		
	上限	理想	下限	上限	理想	下限	上限	理想	下限	上限	理想	下限
県北	62	60	57	586	552	519	11.0	10.8	10.6	42	40	39
中央	63	61	58	559	515	471	10.9	10.7	10.5	44	42	40
県南	64	62	60	484	463	443	11.0	10.9	10.7	43	42	41

（県農林水産部水田総合利用課発行「稲作指導指針」参照）

「令和4年度園芸畑作物反収向上に向けた検討会」開催

ＪＡ全農あきたは５月３１日、秋田県ＪＡビルで「令和４年度園芸畑作物反収向上に向けた検討会」を開催し、ＪＡ営農指導担当者や県本部関係部門担当者など４５名が出席しました。稲作を基幹とする本県農業において、農業者所得の増大・農業生産の拡大をはかるため、秋田県とＪＡグループが連携し複合経営の推進に取り組んでいます。



ＪＡ全農あきたは園芸振興の課題とされる反収向上対策として、令和３年度から多収性品種の導入や排水対策などの反収向上メニュー（試験）による実証を７ＪＡ３９実証圃で実践しました。今回初めて開催した検討会では、ＪＡ全農あきたの加藤政尚技術参与、長澤淳良技術参与を座長として、令和３年度の実証結果についてＪＡ全農あきたの担当者から品目ごとに説明し、ＪＡの営農指導員から慣行区と比較した実証区の品質・反収結果を説明しました。そして、その実証内容と課題に対し、座長を中心にＪＡ間で課題の共有化をすすめ、改良点などの意見・情報交換を実施しました。

今回の検討会をふまえ、令和４年度においても品質・反収向上につながる実証課題に取り組み、ＪＡの営農指導力を発揮した栽培技術の構築と農業経営体の所得向上を目指します。



「令和4年度全県JA稲作担当営農指導員大会」開催

JA全農あきたは6月8日、「令和4年度全県JA稲作担当営農指導員大会」を秋田市で開催し、県内JAの稲作担当指導員や関係団体職員ら約80人が参加しました。

この大会は、本県の稲作生産者の営農を支援し、JA営農指導員のさらなる栽培技術向上と連携強化を図るとともに、生産者の営農安定と手取り最大化の実現、秋田米のシェア拡大・系統集荷結集に資することを目的に開催しており、今年で4回目となりました。



会場では、JA全農あきたの吉田保米穀部長が「安定的に秋田米を消費者に指名してもらうため、これまで培われてきた高品質・良食味米生産の継続、生産者を強力にけん引できる営農指導員の活躍が必要不可欠。今後とも一層のお力添えをお願いしたい」と挨拶しました。また、JA全農あきた米穀部の児玉徹参与から「温暖化時代を生き抜く稲づくり」について、秋田県農業試験場から「カメムシ類の防除対策」について講演が行われたほか、「あきたこまち」を基準米として「ひとめぼれ」「サキホコレ」の食味官能試験も行いました。大会の最後には、営農指導員を代表してJA秋田しんせい営農経済部米穀課の長田翔さんが「営農指導アクションプラン」を読み上げ、栽培技術の研鑽と品質・食味の高位安定生産のさらなる高みを目指し実践していくことを確認しました。



食味官能試験



「営農指導アクションプラン」の申し合わせ

水田の異常還元における調査方法の勉強会を行いました

J A全農あきたは6月17日、J A秋田おばこ管内の圃場で、水田の異常還元における調査方法の勉強会を行い、生産者や県内J A稲作営農指導員、秋田県やJ A全農あきたの関係者らが参加しました。



今年度から、農業の持続的な発展と農業生産に由来する環境負荷の軽減に寄与することとして、米の生産で発生する温室効果ガス（メタン）の低減と、温暖化にともなう高温障害への対応と高品質・良食味米生産の栽培技術を組み合わせた栽培体系の確立を目的に「水田の異常還元における調査」を行っています。この調査は、実証圃と対象圃を設け、メタンガスの発生を銀メッキ板の黒変色度合いの測定によって「見える化」しています。今回の勉強会では、異常還元の調査方法を研修しました。



中川主任研究員からの説明



使用する銀メッキ板



実際に設置

講師には秋田県農業試験場の中川進平主任研究員を招き、水田からメタンが発生するしくみや調査に使用する銀メッキ板の設置場所や方法などを説明をしてもらいました。その後、参加者らは設置場所や銀メッキ板の差し込む深さなどを確認しあいながら、実際に圃場に銀メッキ板を設置しました。本調査は、中干し前と穂揃い期に実施します。

秋田県立大学 スマート農業指導士講座開講

秋田県立大学の社会人教育プログラム「スマート農業指導士育成プログラム」の開講式が5月26日、大潟村のホテルで行われました。

本講座は座学や演習などを通じて、スマート農業の普及・指導に必要な知識を学びます。受講生は秋田県やＪＡ職員、生産者など県内外から集まった23名

です。秋田県立大学の小林淳一学長は「スマート農業の普及に向け、開発した技術を農家へつなぐため、さまざまな知識を身に付けてほしい」とあいさつしました。受講生の一人、ＪＡ全農あきた営農支援課の佐藤鏡太職員は「業務ではスマート農業の技術の実証に取り組んでいる。このプログラムで知識を吸収し、現場

にあった技術を提案していけるように頑張りたい」と意気込みを話しました。期間は来年2月までの9か月間で、34科目を全て履修し、最終課題を提出するとスマート農業指導士の修了認定を受けられます。ＪＡ全農あきたは、今後もスマート農業の普及や関連産業の振興を図りながら秋田県を持続的発展に貢献してまいります。



ゆめのせかいをえがいてみよう「モーモーとうろう展」開催

秋田県牛乳普及協会（事務局：ＪＡ全農あきた）は牛乳の消費拡大と酪農・乳業への理解を深めるため、秋田県ＪＡビル1階ロビーにて「モーモーとうろう展」を開催しました。（6月22日～6月29日）この展示会は、秋田県ＪＡビルに勤務する職員の児童を対象に行われました。参加した児童は半紙とパステルを使って自由に絵を描き、牛乳や乳製品に関する絵を加え完成させました。担当者は児童から預かった絵をとうろうにし、個性が光る75個のとうろうが飾られました。展示会後には、ランプも付けて児童たちにプレゼントされました。秋田県牛乳普及協会の担当者は「今回のとうろう展を通じて、子供たちに酪農を身近に感じてほしい」と話していました。



「第33回秋田県JA農業機械大展示会」を開催！

JA全農あきたとJAグループ秋田は6月15日・16日・17日の3日間、秋田県立スケート場を会場に「第33回秋田県JA農業機械大展示会」を開催しました。新型コロナウイルスの影響で3年ぶりの開催となった今回は「進化するスマート農業を体感！」をテーマに、約30のメーカー各社が最新農業機械などおよそ2500点を展示。期間中は約3000人の来場者でにぎわいました。



会場には、自動操舵（そうだ）機能の付いたトラクターや田植機、農業用ドローンなどICT技術を活用した各メーカーの農業機械のほか、共同購入トラクターや、長ネギ・枝豆など園芸関連機種が展示されました。中でも大型農業機械の実演をおこなった「スマート農業実演コーナー」は、来場者の注目を集めました。ほかにも、肥料や農薬、農業資材の展示や、営農管理システム「Z-GIS」の紹介も行いました。各コーナーでは熱心に説明を聞く来場者の姿が見られ、「最新機械の情報が得られてよかった」「各メーカーの機械を比較できてよかった」という声が聞かれました。



好評だったスマート農業実演コーナー



生産現場の声を反映した共同購入
トラクター



営農管理システム「Z-GIS」
の紹介

「えだまめ販売戦略会議」を開催！

6月28日、あきた園芸戦略対策協議会（事務局：ＪＡ全農あきた）は「えだまめ販売戦略会議」を開催し、ＪＡや秋田県の担当者、ＪＡ全農あきたの職員など36人が出席しました。

会議では、ＪＡ全農あきたから令和4年度の生産・販売計画や品質向上対策について、各ＪＡから生育状況や単収向上対策について報告しました。

また、県からは課題である単収向上と品質の高位平準化に向けた取り組みや、排水対策が単収向上にもたらす事例について説明がありました。



ＪＡ全農あきた園芸畜産部の高橋利和次長は「会議の中で出た情報をしっかりと整理し、販売先との共有などに活用していきたい。また今年は梅雨明けが早く、猛暑や干ばつなどが想定されるので、現場でも情報収集につとめしっかり対応していただきたい」と話しました。

ＪＡ全農あきたは今後もＪＡや県と連携し、「オール秋田」体制のもと秋田県産枝豆の生産振興と販売促進に努めてまいります。



お知らせ

秋田米新品種「サキホコレ」イメージキャラクターを決定！！



秋田県は、今秋本格デビューとなる秋田米新品種「サキホコレ」のイメージキャラクターに、本県出身タレントの壇蜜さんに決定しました。今後はテレビCMをはじめとした様々なシーンで「サキホコレ」をPRしていただきます。